

# 地質ニュース創刊の頃からかけ足20年記

—元広報係長 故高橋 博氏を忍んで—

廣 山 禎 子<sup>1)</sup>

地質ニュースは、1953年（昭和28年）3月にその第1号が発行された。

今の若い人には信じられないかもしれないが、当時は、食堂で昼食を食べるためにはお米を預けなければならなかった。出張に出かける所員は米や食料、着替、調査用具等を大きくて重いカーキ色の木綿（キャンパス地）製のキスリングというザック（備品！）に一杯詰め込み北海道へ行く人は熊よけのラッパをぶら下げ重い山靴を履いてのいでたちだった。

甘いお菓子が少しずつ出回り始めていた。人々は皆ほっそりとしていて太った人は少なく、デパートのトイレにペーパーがついたことが話題になるほどだった。日本がようやく敗戦の傷手から抜けかかっていて復興のために日本中が活気に満ちていた頃だった。

その頃大阪出張所に勤務されていた高橋 博氏は、当時の所長三土知芳氏に「広報誌を発刊するので担当せよ」とのお達しを受け上京して来られ、昭和27年8月1日に企画課広報係長に任ぜられ、地質ニュース発行の運びとなる。創刊号で三土所長は「ニュースに寄せて」として次のように発刊の辞を述べておられる。

『独立1周年を迎え、漸く本格的復興の段階に至り、益々産業技術の振興を要するの秋、当所は従来の活動を広く一般に公開し、我が國産業経済復興の一助となす目的で茲に地質ニュースを発行することに致しました。

狭小なる国土と過剰人口を抱えた此の邦は、国土の有効利用、地下埋藏資源の開発、未利用資源の活用等により、産業基盤の拡充強化を計り、以つて国際市場にその活路を見出すべきであります。即ち電源の開発や、新技術導入による地下埋藏資源の開発、地下水、温泉、地熱の活用等々私達の開発すべき資源が未だ山積されているのであります。

当所は創立以来70有余年に亘り我が國唯一の調査機関として、我が國土の地質、地下資源の調査研究を続けて来たものであり、今後も無限に続けられるべき使命を背負っております。

当所はこれらの事業遂行の爲地質、鉱床、燃料、物理探査、技術の5部と資料、企画、庶務の3課及び地質相談所を設け、地方には、北海道に支所を、仙台・名古屋・大阪・広島・丸亀・福岡に駐在員を置き約500名の所員が、我が國経済自立の基礎となるべき、國土の総合的調査研究を続けております。

之等の調査研究の成果はそれぞれ地質図、報文として公表されていますが、実際の活動状態を刻々発表し皆様方の認識を深めると共に御協力を得て、我が國産業技術復興の一日も速やかならんことを希望しますが故に、地質ニュース発行に当り贅言を呈する次第であります。』

初年度（昭和29年度）は、6号まで刊行された。ちなみに創刊号は8頁、2色刷、写真7枚、凸版（図面等）10枚、印刷部数1,000部、単価38円60銭、所要日数43日であった。

昭和30年度から月刊となった。



写真1 出張校正。昭和30年11月、アルト印刷(株)2階の「校正室」で。菅沼氏(右)、廣山(左)。(特集「地質図幅」)

1) 地質調査所 国際協力室

キーワード：地質ニュース創刊の頃

時期に応じて「地熱」「天然ガス」「石油資源」「地質図幅」「日本の石炭」等の特集号を刊行した。

当時の印刷というのは今のように便利なワープロなどなく、植字工が活字を拾って割り付け通りに紙面を組む作業を行っていた。八丁堀の二階建の民家が印刷会社で、校正刷ができたと連絡があると広報係の3人が出張校正のために出かけた。一階が工場、二階が社長の住居兼校正室であった。下っ端の私は校正刷を溝の口(本所)や河田町(分室)の執筆者に持参し、校正が終わるのを待つ間各部の部屋を巡って歩き、出張の苦勞話を聞いたり、原稿の執筆を頼んだりして、著者校正を印刷所に持って帰るのが仕事だった。

昭和28年10月1日付で地質調査所長の交替があり、新たに兼子 勝氏が就任された。兼子 新所長は前所長より更に識見高く、広報活動にも意欲と理解を持っておられた。兼子所長の指導、支援のもと、高橋広報係長は地質ニュース編集に打込んだ。

戦後の復興に日本中が一所懸命だった頃で、日本各地には鉱山会社やその鉱業所が数多くあり日本中が利用できる限りの鉱物資源を採掘していたようだ。また、地質ニュースは大学入試の試験問題の出題ソースとの評判がたち、学生諸君の読者も増え発行部数も増加の一途をたどった。

編集計画については、企画課長が広報委員長となり、各部から推薦の広報委員と広報係長(事務局)が年1-2回広報会議を開き次年度の編集計画書を作った。それは地質調査所研究計画書を参考に調査が終わった頃に本報告書とは別の広報的な記事を予定し、シリーズ物を加えたきわめて簡単な内容だった。ちなみにシリーズ記事の「車窓展望」、「地質調査所の標本」等は好評だった。「花粉のゆくえ」、「ポーフリカッパー鉱床」、「日本の地質」等のシリーズ記事は後年まとめて新書版「地下の科学シリーズ」として19種冊が発行された。

特集号は、その時期に適した内容を主題として発行されたが、特に地盤沈下が騒がれた折、工業用水課長であった蔵田延男氏が鋭意記事を執筆し、工業用水の特集号を刊行、増刷して関係官公庁、国会議員等に配り、工業用水法の設立に向けたPRに大いに役立った事が印象的だった。

原稿は全部地質ニュース用原稿用紙に広報係長が書き写した。図面は元測量課員の大先輩が烏口(カ



写真2 企画課旅行。昭和30年6月、於国家公務員保養所 富士五龍荘。明け方3時まで床の間の大つぼを抱えて踊る人、酔って気分の悪くなる人、どんと座って飲み続ける人、飛んで来たカナブンをばくりと食べる人、女子高出たての新人には大ビックリの一夜だった。この頃から所長は企画の旅行に同行されていた。課長が朝日 昇氏、水落氏、坊城氏、小尾氏、伊集院氏など変わった苗字の人が何人もいてこれもびっくり。

ラス口)を使って墨で地層や棒グラフの模様等を手描きで作成していた。

原稿、写真、図面を揃え割付が出来上がると企画課長が全原稿を読み通し印刷屋渡しとなった。

広報係は初め高橋係長と係員1名でスタートした。昭和31年には係員が2名、秀れた写真(撮影もプリントも)技術の持主正井義郎氏を昭和34年に資料室から迎え、校正要員に石山尚珍氏が併任され、兼子所長の理解と応援のもと、地質ニュースだけでなく、要覧、年報、グリーティングカード、映画(始めは8mm、のち16mmの撮影、編集)、新書版、地学啓蒙用小冊子、国際会議の事務局手伝い、その取材・記録等も担当した。

地質ニュースの表紙、専用封筒は当時の産業工芸試験所をお願いして、2-3年毎に数種類のデザインをしていただいた中から決めていた。ある時期には、所員が出張して撮影してきた写真などの収集をめざして、写真コンクールを毎年行った(これには、思った程多数の応募がなく、出品の常連は佐々木雅一氏、石原舜三氏だった)。

地質ニュースの印刷部数はついに4,000部となり印刷費、専用封筒経費、広報係全員での宛名印刷、袋詰、小包作り、郵便局に搬入等の1日かか



写真3 恐怖のジグザグ行進（昭和32年5月1日）。ベレー帽の女性が広報係初代係員菅沼久美子氏。左は外郭団体をにらんで退職された杉山敦子氏。後列に坂巻幸雄氏、島津光夫氏、佐々木昭氏も見える。

送業務及びその郵送料、OBから預かった送料（切手）の管理等々あまりの業務と経費の増大のため地質調査所のみでは支えきれなくなりその発行を出版社に委託することになった。

兼子所長はかねてから、地質調査所の外郭団体を設立し、いずれは、その外郭団体に、当時の広報係で行っていた業務を委託してはどうかと考え、地質ニュースの発行を外部に委託する際にそれに備えて地質調査所の職員を2人、関わりある人を2人その委託する出版社に送り込んでいた。そして、高橋係長もいずれは退職してその出版社に移り地質ニュースのお守りをしたいという考えがあった。その外郭団体では地質ニュースだけでなく地質調査所の出版物、岩石標本写真集や絵はがき、不要岩石資料から作ったウエイト、ペンダント、キーホルダー等を販売する等の構想があったと聞いている。余談だが、今そのような団体があるならば国際協力事業団の研修や記念行事の事務局等の役割も果たしてもらえた処であろう。このもくろみはすべて突然の兼子所長の退官で泡と消えた。

委託発行となった地質ニュースは表紙を写真1枚で飾り（石原舜三氏の作品が数年続いた）頁数も増え、カラー頁も加えられた。記事に著者名が入り定価が付けられ、英語名Geology Monthly（嶋崎吉彦氏命名）を持つ立派な広報誌となった。

発行当初からの記事の内容は地質調査所の所掌す

る分野の地質調査天然資源である鉱物、ウラン（核原料物質）、天然ガス、石油また、それらの調査に係る最新の技術、機器の紹介等常に先端をいっていたと思う。また、一般の専門外の人々にもわかり易く、興味深い記事ばかりであった。

昭和30年代の始めに留学された方々は船で渡航して居られたが、海外協力協会（現在の国際協力事業団の前身）が発足して発展すると共に一年に1～2人の研修生の受入れが始まり、所員もどんどん海外へも出張するようになった。ひところの地質ニュースには海外事情の記事ばかりと所内で恥ずかしいかのように批判されたが、関連の民間の会社や一般の読者には外国の国々の事情を知るに一番のテキストと、実によく読まれたとのことであった。今では厳しくなった国内給のおかげで四苦八苦している国際協力事業団の専門家派遣は工業技術院の他の研究所よりはるかに先んじていた筈だ。

Geotimesを目指せとの掛け声もあって、高橋係長は地質ニュース一筋、寝言にも「地質ニュース」と言う程ではないかと思う程だった。軍人時代の軍務から来た「戦車隊長」のニックネームがついたのもこの頃だったと思う。原稿整理はさすがにもうやめていたが、楽しそうに割り付けをし、広報の部屋を「溝の口」から外勤して来た方達の鞆を置く所、お茶を飲む所にして、さりげなく原稿執筆の約束を取り付けたりしておられた。委託販売に移行した時には予約購読者数を増やせということで、諸学会の年次総会等にバックナンバーを売りに行ったり、学生時代からの読者の就職先に広告をもらいに行かされたりもした。

地質ニュース係（広報係）には20年も所属していたが地質ニュースの割付はした（させてもらった）事なし、校正はちょぼちょぼ。しかし、部長会議（所議）で事務官として初めて承認されて随行した映画の撮影出張、海外地質調査協力室の設立以前に企画課が担当していた国際会議の事務局員としての手伝い、リモートセンシング技術の祖となった国連主催の空中写真講習会、年報の原稿整理と割付・校正、写真借用や原稿受取りのための外勤で出かけた多くの場所や先生方に巡り会ったこと等は実に有り難く、得難い良い経験ばかりで後々の業務遂行に大いに役立っていると信じている。

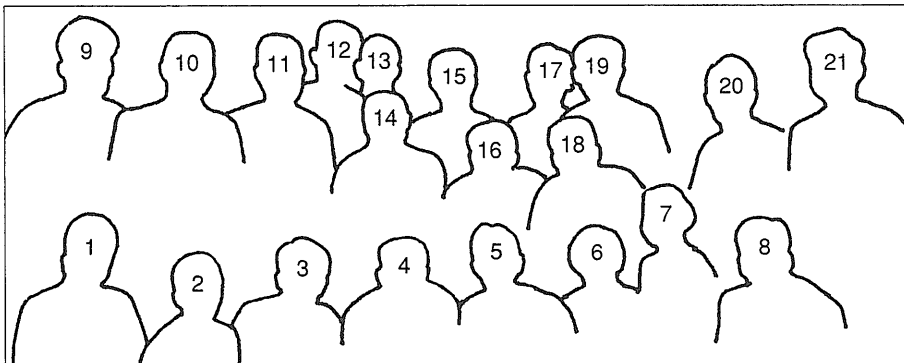


写真4 昭和35年企画課忘年会 於神田ぼたん（正井氏撮影）。

1 土屋栄子, 2 杉村禎子, 3 垣見俊弘, 4 小林 勇, 5 坊城俊厚, 6 杉山敦子, 7 瀧沢朝代, 8 大和栄次郎, 9 吉田 滋, 10 小塚勝弘, 11 高橋 博, 12 有川 聡, 13 河野迪也, 14 伊集院 弘, 15 柴藤喜平, 16 高橋 博, 17 村上義憲, 18 横江一男, 19 水落 克, 20 石川賢寿, 21 井上絢夫。

この原稿については、「資料類をきちんと用意し、時間をかけて」ではなく断片的な記憶により、時間の制約の中、内容が相前後したり、昔のこととはいえ地質調査所の業務等、素人故のいい加減、あいまいな点も多く、大変失礼とは思ったが、高橋 博氏の永年の孤軍奮闘、努力によって支えられてきた地質ニュースの編集担当部署に所属していた者として、遅くはなったが、また到底書き尽くせるものではないが、尊敬と感謝を込めて記させていただいた。

継続力は力と言うが、500号という驚異的な号数を迎える地質ニュースは、その創刊号から地質ニュース編集のため昇格も投げ打ち昭和55年9月1日に退職される間での28年間を地質ニュース一筋で貫かれた高橋 博氏にとって、大きな勲章の様な気がする。特に昭和54年11月の筑波移転後退職されるまでの約1年間は、病床にあった夫人を看病されながらの勤務であった。氏のあとを継ぎさらに地味な努力を重ねて来られた多勢の皆様我心から敬意を表した



写真5 良き時代の企画3人男（昭和40年1月）。高橋 博広報係長（左）は、地質ニュース編集に張り切っていた。伊集院 弘氏（中）は、予算係長で朝から晩までソロバンパチパチ、調査所の予算の元締めだった。横江一男氏（右）は、当時の測量課から企画課へ移られ、企画業務担当。

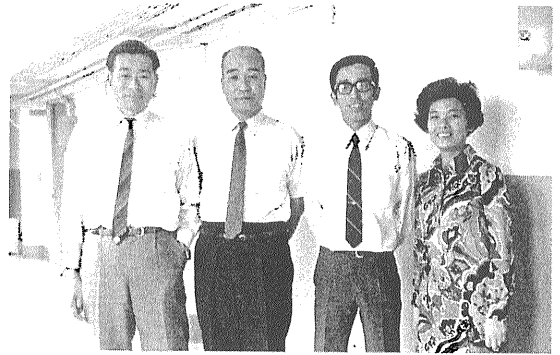


写真6 高橋係長のもと一番永く続いた広報係のメンバー（昭和45年10月2日）。左から正井、高橋、山本、廣山。

い、これからも地質ニュースが人々のより良い明日のための地球科学に関する貴重な情報源であり続けられることを心から願っている。

終わりに「地質ニュースの内容はいかにあるべきか」とは、刊行当初から地質ニュースに少しは関心を持って下さる方々の間でいつも議論されてきたこ

とである。まずは地質調査所の存在とその業務を広めるため、ひいては地質学（今や地球およびそれに関わる環境に関する研究）の啓蒙に貢献することにあると私は思っている。いつの時代にも地質調査所は人々のより良い生活のために存在し、今現在も多くの国々から頼りにされている。

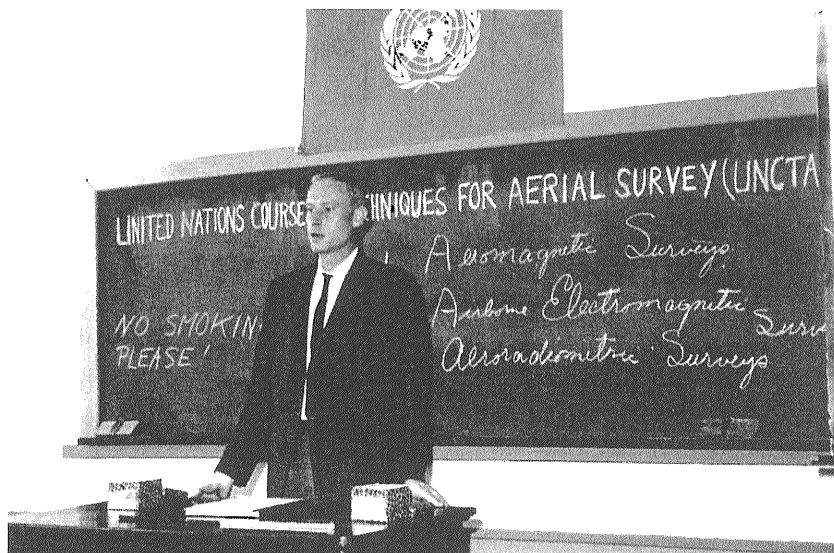


写真7 William A.Fischer博士。国連主催の空中写真地質講習会（1961年10月5日～11月25日）に米国地質調査所からカナダのLaurence Mouley博士と共に派遣され、約3カ月に及び講義をして下さった。当時の西洋人には珍しく、単身で新橋の第一ホテルから溝の口まで通勤されていた。